

精神科治療学編集委員会

(五十音順)

編集委員

天野 直二	新井 平伊	加藤 敏	兼本 浩祐
鈴木 國文	仙波 純一	中安 信夫	堀川 直史
本城 秀次	宮岡 等	(統計担当)三宅 由子	

編集顧問

市橋 秀夫	笠原 洋勇	上島 国利	倉知 正佳	栗田 広
小島 卓也	融 道男	中井 久夫	永田 俊彦	樋口 輝彦
皆川 邦直	村上 靖彦	山口 直彦	吉松 和哉	

編集後記

社会不安障害 (social anxiety disorder : SAD) という病名が保険における薬剤の適応症として登場した。製薬メーカーのウェブサイトには「対人関係で過剰な不安を感じ、周りの人の自分に対する評価が気になる」「原因は主として脳内のセロトニン神経などの機能異常と考えられる」「社会不安障害を適応症とする薬剤は日本にはなかった」などの記載がある。対人恐怖に対して精神病理学の知見を参考にしながら詳細に症状を評価し、病態を分類し、薬物療法に加えて精神療法的な対応を行ってきた時代とは隔世の感があるという言い過ぎであろうか。脳の機能異常という表現が生活史や性格との関係を否定するものではないが、これほど簡単に「セロトニン神経などの機能異常に起因する」などと言ってよいのであろうか。不安神経症がパニック障害や全般性不安障害となり、強迫神経症が強迫性障害に変わる中で実践されてきた「大雑把に症状を評価し、その症状は脳の異

常だから薬で治す」とする精神医療をまた一歩進めようである。

それにしてもこのような変遷を大した批判も出さずに受け入れる日本の精神医療界には違和感がある。ある本によれば、製薬メーカーにとって医療はまだまだ埋もれた金鉱であるという。特に精神疾患では、症状があっても治療を受けていない者が多い、原因は性格ではなく脳の機能異常であるという説明が社会に受け入れられやすい、肯定も否定もしにくいような仮説を提唱しやすいなどの特徴が販売戦略と合致しやすいのかもしれない。社会不安障害という病名は、要らぬとは言わないがあまりに議論が乏しいまま広まりつつあるように思う。

前号と本号は双極性障害の特集である。ここでも治療ガイドラインの作成、薬剤の適応拡大や適応外使用とそれらを支える研究における製薬メーカーの資金提供などが十分議論される必要がある。

(宮岡 等)

精神科治療学

Jpn. J. Psychiatr. Treat.

第20巻 第12号(2005年12月19日発行)

定価：3,024円(本体2,880円)

年間購読料：定価42,483円(税込み、増刊号含む)

発行者—石澤雄司

発行所—星和書店

〒168-0074

東京都杉並区上高井戸1-2-5

PHONE 03-3329-0031(営業部)/0033(編集部)

F A X 03-5374-7186(営業部)/7185(編集部)

U R L <http://www.seiwa-pb.co.jp>